

土屋 祐貴
(つちや ゆうき)

東京理科大学
理工学部
建築学科



アメリカの住宅の寿命は100年、ドイツは80年、イギリスは140年とされているのに対し日本の住宅の寿命は短く26年程で建て替えられてしまいます。

子供が独り立ちしていけば老後の夫婦2人には広すぎるスペースが余ってしまい、家一軒分のローンは残ります。「この日本で本当に家を買う必要があるのか」という点に疑問を持ちました。

そこで、私は「購入と賃貸」両方使って生活する住宅を提案します。住宅にあるリビングや個室、トイレ、風呂、キッチン一度分解します。個室を集めて賃貸とし、必要に合わせて借りていきます。一生使うリビングと個室を1だけ購入し、その周りに配置します。

賃貸の個室の上に共有空間の「道」を作り、その道を楽しめる空間にするため、図書館の読書スペースやリビングの庭としても使用していきます。

その共有空間に架かる屋根は各家庭のリビングから伸ばします。みんなで少しずつ力を合わせてつくる共有空間を視覚化するシンボリックな屋根です。

講評

所有でなく活用という視点で、住宅の要素をバラバラにして、町の要素と一緒に再構築した、新しい「家」「まち」「道」の提案である。最低限必要なスペース（1寝室、LDK）以外は借りる、貸す、店舗等にするという計画で、吉祥寺という住宅と商業が入り組む場所ならではの提案で、全体で面白いストリートを形成している。メインの「家」部分については、プライベートな空間が極端に少なく、キッチン以外の水廻りは共有する計画となっているため、管理するには住民同士の協力が必要となる。それを表現したのが通り抜けできる「道」空間にかかる屋根。これは協同作業で造る設定となっており、インパクトの強いデザインで全体のシンボルとしている。自由な屋根の連なる「道」からは、空が見え、外部でも内部でもない気持ち良さがあるが、この印象が強すぎて、あたらしい「家」の提案が弱くなったように感じた。コンセプトの根幹にある合理的な考え方を、全体のデザインに貫けば良かったのではとも思われたが、大胆な発想と、まちの魅力を高め、周辺の環境に合った景観の提案に、潔さと大きな可能性を感じた。

(審査委員：佐倉 桂)